

各地で大雨の被害もたらした梅雨、早く終わってほしいものですね。「障害者」の皆様の皆様、お子さまお元気でしょうか。いよいよ「全国重症児(者)を守る会」石川県支部結成大会の日もせまってきました。事務局では具体的な準備に追われていますが、有意義な結成大会が開催できるよう皆様のお力もお借りしたいと思っていますのでご協力をお願いします。

みんなで

石川支部結成大会に参加しよう

—— 8月1日午後 福祉会館にて ——

第2回総会で決定されたように今年度石川県支部を結成することになりました。そこで8月1日に結成大会を開催するための諸準備を始めています。会場は石川県社会福祉会館に決定しました。「最も弱い者を一人ももれなく守る」という基本精神のもと、この子ども達の幸せのために支部としてどのような事業に取り組むのかまた、行政に何を要求していくのかなどみんなで話し合い、みんなで決め、みんなで活動していきたいと考えています。

大会の式次第が以下のように決まりました。ぜひ今から日程を開けて多数参加されるようお願い致します。

1. 開会の挨拶
2. 守る会三原則斉唱
3. 支部結成準備委員会代表あいさつ
4. 来賓祝辞
5. 議長選任・議事
 - (1) 会則の承認
 - (2) 平成11年度事業計画(案)の承認
 - (3) 平成11年度予算(案)の承認
 - (4) 役員等の承認

6. 閉会の挨拶

..... 休 憩

7. 記念講演

講師 石川県厚生部障害福祉課課長 稲手信次氏
演題 「石川県の障害福祉行政について」



尚、当日はボランティアさんもお願ひしてあります。

全国重症心身障害児(者)を守る会

創立35周年記念大会

開催される

去る6月19~20日にわたって東京で「全国守る会」の35周年記念大会が厚生省はじめ多くの来賓の方を招いて開催されました。保護者、施設関係者、医師などを合せて1300名余の参加者が集まれたとのこと。

「守る会」結成当初から重症児に深く関わってこられた秋山ちえ子さんの「この頃思うこと」という講演がありました。つづいて伍藤忠春氏(厚生省)、有馬正高氏(東大和療育センター院長)、末光茂氏(旭川荘専務理事)、飯野順子氏(都立村山養護学校校長)の各氏によるシンポジウムが行なわれました。石川からも石川先生、山本・越坂両副会長が参加しました。

また、大会の総意として以下のような要望書も提出されました。

- ・国立療養所に蓄積されている豊富な知識と経験を生かしていただき、国立療養所においても重症心身障害児・者通園が実施できるようにしてください。
- ・在宅重症心身障害児・者を対象とした訪問看護及び介護福祉士派遣制度の事業化を図って下さい。
- ・養護学校の通学に保護者が同伴しなくてすむ医療ケア体制の充実を図って下さい。
- ・強度行動を伴う児童や成人への処遇方法について、最新の研究成果を取り入れた有効な手法の普及と一層の開発推進を図って下さい。
- ・重症心身障害児施設には、入所児・者の障害の状態に合った個別処遇の充実と療育環境の整備を図って下さい。
- ・国立療養所再編成計画の見直しに当たっては、重症心身障害児・者の療育環境及び療育内容の向上を図る視点を貫いて下さい。
- ・国立療養所の独立行政法人への移行に当たっては、法人としての特徴を生かして柔軟な運営ができるようご配慮下さい。

新入会員の紹介

全国守る会・石川守る会・・・正会員

久保祥子 大豊登代子 谷内久一

寺本雪子 松本康子 川畑義光



現況

正会員 63名

在宅、入所を含む

賛助会員 24名

全国大会に参加して



越坂由紀子

東京で開催された全国大会に参加し、一日目の講演とシンポジウムを聞きました。外は雨で肌寒いというのに、会場は1300名余りの人で溢れ、汗ばむ程の熱気に満ちていた。「この頃、思うこと」という同じ演題で30年も話されているという秋山ちえ子さんはとても82才とは思えないほど、若やいだ声とたくみな話術で聞く人を魅了していかれた。

昭和24年当時重症児のことがなおざりだった頃、世間の好奇の目にさらされながらこの子ども達を抱えていくことはとても困難なことだった。そんな母親達に故小林堤樹先生（日赤産院小児科部長）が一人に一時間ゆっくり関わることでお母さんの気持ちが楽になっていく様子を見て、感動されたということだった。

また、近江学園を主体にびわこ学園を創設され、「この子らは世の光なり」と提唱された糸賀先生との出会いで重症児への見方が大きく変わり、その後設立された「全国守る会」との親交も厚く、会場を見渡しながら創立当初の苦労も思い起され、「こんなに沢山の方々が集まって・・・」と絶句し涙される姿に私は先生の重症児への深い愛情とご理解を感じ、胸がいっぱいになり、この会に参加できたことを心から幸せに思った。

そして話は昨日ラジオで話されたというラブレターの話に移った。目が見えず車椅子のなおたか君が寝たきりのまゆみさん（高校生の時盲腸の手術中、麻酔ミスで植物状態になった）に宛てた詩のようなラブレターが読まれていった。まゆみさんのお母さんは彼から送られてくる一方通行のラブレターがはたして娘にわかるのかと心配されていたが、回を重ねる内に「なおたか君からお手紙よ」と話し掛けるとまゆみさんの耳から頬にかけてポーッと赤く染まるのを見て「やはりわかっているんだ」と確信されたエピソードも混じえながら朗読は終わった。私は愛の本質に触れた気がして清々しい気持ちになった。まゆみさんの医療ミスは裁判になったが、当事者の思いとは関係なく、法律に照らして進められる医療過誤裁判に心を痛められたお母さんの思いに及ぶと、私は2年前、退院を目前にして病院の医療ミスで亡くなった娘のことを思った。

今年3回忌の法要を終え許せる心になりたいと努力してきたものの、こんな時簡単に封印を破って、当時の状況が生々しく吹き出し、自分自身うろたえてしまった。しかし、ラブレターの感動が強烈だったことでシンポジウムの間メモをとりながらも娘との楽しかった日々を思い出していた。

恋とか結婚とは縁がないとあきらめていた娘だったが21年の生涯で4人の男の子から思いを寄せて頂き、母親としてはどれ程喜ばしかったことか・・・。

一度は母親同志で早い時期にタキシードとウェディングドレスで写真を撮っておきたいと相談したこともあったY君は体調を崩し中学部3年生の冬に亡くなってしまった。本校の先輩の男の子とかわいい後輩の男の子は行事で学校へ行くと、いつの間にか娘の傍へ来て頬ずりしたり、抱き締めたりするので、やっと座っている娘が倒れないかとハラハラしたものだった。

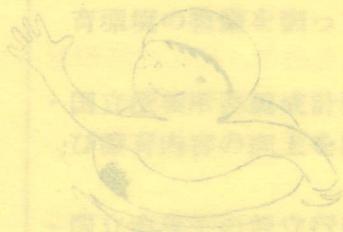
高等部を卒業した娘は通所施設で24才のハンサムな青年から「好き」と言って

もらった。彼は娘が通園する日は日頃嫌がっている車椅子を自分で動かして玄関先で待っていて、帰りは娘の乗った車が角を曲がるまで見送ってくれ、マイペースな娘をいつもそっと包み込むようなやさしさで見守ってくれた。施設の先生も娘が亡くなったことを彼に伝えられず今も入院中ということになっているそうだ。

シンポジウムの中で飯野順子先生は養護学校が今、直面している医療ケアの必要性を強調しておられた。他のシンポジストから「自分の子どもさえよければいいという自己中心的な親の思い方に対し耳の痛い指摘もあったが、その底には重い障害を避けることもできず全身全霊で受けとめ、生きていこうとしている子どもの命を守り育てている親だからこそ、福祉、医療、教育など様々な分野の多くの方の心を動かし、手をさしのべてくれていることに気づいてほしいという願いを感じずにはいられませんでした。

「石川を守る会」では今年8月に全国重症心身障害児（者）を守る会石川県支部結成大会を控えております。「この子らは世の光なり」、人々の心を変える不思議な魔法の力を持つ子ども達の手助けをして下さる人の輪が、大きく大きく育っていくことを心から願っています。

私はこの光への道を歩むことが争いのない、平和な国づくりへの早道であると言果しても決して過言ではないと信じております。



会長	飯野順子	副会長	大塚登代子	幹事	谷内久	会計	高橋念瑠
監事	寺本智子	事務局長	松尾美智子	事務副局長	川崎美穂	事務副局長	高橋念瑠
事務局長	川崎美穂	事務副局長	高橋念瑠	事務副局長	高橋念瑠	事務副局長	高橋念瑠